

一茶秀句二十五句鑑賞

※典拠は谷川 雁氏（詩人）の撰句による。

① 今様の風上がりけり乞食小屋

本組に真塵をぶらさげて作った乞食小屋、がここでも多くの男子の子供が生活している。風揚げのシーズンだが、街で売っている奴隷などとは見かけない。今様の、色々なヒゴと様々な彩色の紙で作った風、それが不思議によく上がる。一茶の眼が貧民の子達へと向けられている事はいうまでもない。切れ字は「けり」。

② はんの木のひよいひよい先は春辺哉

高さ十五米もあり、家建てにもよく使う嫌の木、そのハンの木の梢の彼女をひよいひよい見るともう春はそこまで来ている。同音反復の「ひよいひよい」という擬態語が非常にユーモラスに効果的に用いてある。「哉」が切れ字、h音（はん、ひよいひよい、はるべ）が意図的に使われていて、心はずむリズムである。迎春の筆者の素朴な心情が横溢した句だ。

③ 夕空をにらみつけたる蛙哉

上村敦之

春の西空は茜色で赤みがまし大変美麗だ。所がこの蛙は、夕暮が迫り夜のトバリが降りるのが甚だ機嫌が悪い。その西空をすごい形相でにらみつけている。巨視と微視の相関がよく利いていて、言外のユーモアが視覚的で巧緻である。切れ字は「哉」。

④ 毒水を呪ふやうな小てふ哉

蝶やトンボなど昆虫は、池・沼・沢などの水をさつと吸引し飛翔する。この場合、トプカ汚水で不衛生な水を湛えているものであろう。本能的に毒素のある水を呪うように見える小蝶だよというのだ。「毒水をのろふ」が「やうな」に続いて直喩が非常に具体的で、しかも主体が「小蝶」という微生物だけに、その警戒が痛々しい。切れ字は「哉」である。「やうな」は「やうなる」の口語化で近代への接近を表す。

⑤ 人の世や山の上でも田植えうた

厭世的宿命ともいえ、皮肉な表現ともいえよう。この人間社会は平地で米麦、野菜の栽培だけでは足りなくて、かなり高い山畑で

も一坪も余さじと稲の苗を植えている。巨視的な見方をする、人間の貪婪な欲望とも取れる。又そうした激しい労働をせねば生きていけぬという農民への憐愍をよんだとも取れる。切れ字は「や」である。

⑥ 才子が天上するぞ三ヶ月

「ぼうふら」ともいうが、蚊の幼虫、赤い色で身体を山げ泳ぐ。それにしても今夜の三ヶ月、鎌型の流線型は余りにも美しい。水たまりの中のボウフラもその美しさに魅せられ天界へ昇っていくと見た。月の美観を最大限に空想、架空化した。「ボウフラと天界の月」の連結は尋常な発想ではない。どの句にも内在するユーモア（フモール）がこの句にも典型的に表れている。切れ字は「ぞ」。

⑦ 淋しさを鵜に言い付けて放す也

身体の隅々までみなきる淋しさ（親なく、妻去り、子死ぬ）。その淋しさを鵜飼いの鵜に話し掛け、鵜も自由になり孤独でいたかろうと首繩を放してやった。珍しく寂寥歌といえようが、「……鵜に言い付けて」と鵜を人格体として把握している点、やせ蛙・蠅等等と同じ趣向である。切れ字は「也」なり。

⑧ 炎天に夢くふ虫の機嫌哉

世は様々「夢くふ虫も好き好き」だが、この三伏の暑さ、炎天に身体中辛いタデをさもうまそうに食っている虫がいる。しかも「機嫌だ」。一茶は日常の光景、言辭などを逆の角度から精密に写

実、表現する性癖があったようだ。それが俳句の生命であるウイット・ユーモア・アイロニー等につながり、芭蕉と比肩される名匠とされるのではあるまいか。三段法で、①炎天下 ②（辛い、皆から排斥される）タデを食う虫 ③「二」機嫌だ！この表徴は非凡である。切れ字「哉」。

⑨ 夕顔の花めで給へ後架神

日本の旧家には、カマドにも井戸にもそして後架（便所）にも神様が祭つてある。この場所はとかく敬遠されがちだが、可憐な夕顔の花よせめて貴女だけは、ここの神に愛情をかけてほしい。この「後架神」が俳味のシンボルマークで歌には絶対にならない。初中句の明るい温和なムードと下五の陰湿さが実に鮮やかな対照をなす。切れ字はないが、「給へ」が準用言の命令形でその代用をしている。

⑩ じっとして白い飯食ふ暑さかな

この句の発想もユニークだ。普段なら、一日中肉体労働などして、腹をへらし五・六杯のお代わりをしていた。所がこの場合、一茶は書見程度の時間浪費で、殆ど身体を動かさず、白飯を食う、不思議なもので、静かな時を過こし、一人で食事すると汗が額から脇の下からしたり落ちる。初中二句への風刺も感じられ、下五の「暑さ」の心情的感得が鮮やかに描写されている。切れ字「かな」。

⑪ 七夕や天より続く女郎花

陰曆七月七日(陽曆九月上旬)女郎花があの美麗な姿を一斉に開花する。はるかかなたまで咲いている〇花を見てみると、折から牽牛織女の伝説も思い合せて、天から地へと咲き続いている感じがする。「七夕」と「女郎花」の広義の縁語関係、「〇花が天より続く」とみた空間的、巨視的発想、一茶ならではの大胆な句作である。切れ字は「や」。

⑫ 人のなす罪より低し雲の峯

これは一種の比喩歌だ。人の犯す犯罪と「雲の峯」の対比はやや唐突だが、じっくり考えると、人の世や家族内の相克を経験し尽くした一茶ならではの実感の句だとわかる。殺傷・中傷・憎悪・出世、地位慾・財産慾等々広い意味の「罪」を人間は無限に持つ。しかも「神に誓って犯していません」としゃあしゃあという。日本の「雲の峯」だから三千米前後のピークを指すのであるが、それらより「罪の峯」の方が遙かに高いと見る。地獄の玻璃鏡に写す人のおぞましい罪科を想う。準切れ字は「低し」(形容詞の終止)。

⑬ 秋の天小鳥一つのひろがりぬ

秋の天は高く蒼く広がりを持つ。ふと空を見ると小鳥が一羽飛んでいる。それが焦点となつていよいよ果てしない秋天の広がりを見る。「小鳥一つの」「広がりの」という表現効果が抜群で、秋天のスポットに小鳥一羽を置いたのも心憎い。切れ字は「(ひろがり)ぬ」、完了終止で、この「ぬ」留めが又言い得ぬ緩慢さ、

静謐さを形成している。

⑭ 露の世や露のなでしこ小なでしこ

一句に季語四つというのは類例があるまい。露のようにはかない世、それは三十年・六十年位に圧縮される。今朝のピンクのナデシコに露が一面に降りている。その撫子もまだ蕾を植えて間がない「小撫子」にあつては。切れ字は「や」だが「(露)」の「の」の脚韻、「なでしこ」の「こ」の脚韻が無理なく利いて、独語に似たりズム感を持つ。はかなさの象徴「露(の世)」、あでやかさのシンボル「なでしこ」の重複。この句など現代句であっても不都合はなく、一茶の心やさしさを見る思いがする。

⑮ どちら猫のけふもくらしつ草の花

現代であれば、「今日も暮らしつ草した」というところだろう。捨て猫、どちら猫はまことに可哀相な存在で、定食もなく「くさるゴミ」など入った黒のビニール袋を食い破ってやつと日をしのぐといった惨状である。そういう面では昔の方が人間族と猫族は親近感があつたかもしれぬ。さて、当時のドラ猫は、ろくに食物もなく草花の咲いている広地に行き花をかじりつつ不貞寝をしている。「動物のいとおしみ」の系列に入ろう。切れ字「(くらし)つ」、完了終止で、「ぬ」より切迫し、彼の飢餓感が強く出ている。

⑯ 張にふみつぶされし鹿哉

これは誇張句に入る。逼塞した小家があり、直す人もなく家は横倒れになってしまった。かつては軒にかぶさっていた庇も今は

路上に朽ち果てている。そこらあたりに蟋蟀が住み（この虫は暗湿地を好む）、地上の庇をふみつぶしていると詠んだ。住む人もなく調度も持ち去られ、地上にべしゃんこに横倒れた家の庇のみでは、余りに暗い素材で終わるが、そこにコオロギの（リーン・リーン、リーン・）と鳴く姿態を添えて、ユーモアもある暮秋の化の句となった。準切れ字「し」過・体。

⑬ 笛吹いて山のかがしの御札哉

信州は山国である。様々な案山子为主として雀の米害防止に立っている。が見方を変えたと、自由に稲を食したかった雀たちに感謝を述べねばならぬ。一秋の御札に横笛を吹いて謝意を呈しよう。多くの研究家が指摘しているように、芭蕉が探求家、蕪村が考証家、とすると、一茶はピエロを自認した。案山子を介して害虫へ恩謝などという発想は非凡である。メルヘン性も伴っている句である。切れ字「哉」。

⑭ ほそけぶりあなどりもせで来る雁よ

野の煙ではあるまい、浅間の煙に代表されるように噴煙がこちらの活火山から上っている。さて、雁（がん、かり）は季節鳥、渡鳥で高空を三羽・四羽、四羽・五羽と翼を連ねて飛んでくる。桜咲く春、北へ去り、秋又南下する。この位の格調をもった渡り鳥は細い噴煙などにたじろがぬ。といって侮蔑するわけでもない。殆ど旬日狂いもなく、今年も秋の秋津島へ飛翔してきた。洪いサタイアーが底流にある。切れ字「よ」。

⑮ 蛙穴に入りて弥勒の御代を頼む哉

春、蛙が地下から出て身を隠す穴へ入った。そして釈迦の死後数十億年、煩惱多き人間を救って下さるという弥勒菩薩の在す聖代を穴居してお頼み下さるのだ。初五が四音多く九音、中・下句は正調で頭の重い口調に属す。ユニークな句で一旦地下から出た蛙が（お祈りのため）穴に入り、弥勒の庇護を頼むという、蛙への擬人法を骨子にした句である。切れ字「哉」。

⑯ 析餅や天狗の子供など並ぶ

析餅の実は堅い、しかしそれを木槌で割って粉にし糖分を加えた析餅は実に美味だ。神秘的な高山の山中にある。さていよいよまい析餅出来！村の子も数多く並ぶが、曉闇の頃、天狗の子らが人に姿を見せぬうちにバクリバクリとつきたてを食している。析餅の神秘性がうまく調和して一茶ならではのピエロ性横溢の句となった。「子供など並ぶ」が絶妙。切れ字「や」。

⑰ 死にべたと山や思はん夕時雨

これは悲痛な哀傷歌に入ろう。母の死・継母とのいさかい・上方の徒弟奉公・結婚・数人の子の夭折・妻の死・ずっと年下の後妻との佳き日・そして懷妊・これ程の人生の試練を受け、唯一の子の眼も見ず六十代半ばで死んだ。「死にべた」という言葉は一茶の死の予知であろうか。周囲を囲むグレイの山々が「又死ぬチャンスを選して」と嘲笑うかもしれぬ、夕闇が迫り人生の時雨の哀歌が音立てはじめた。切れ字「や」。

②③ 冬の雨火箸をもして遊びけり

ここには幼心・童心・ピエロの一茶が登場する。信濃は冬、雪も多いが雨も多い。戸外に出て一仕事というわけにはいかぬ。そこで一茶(妻或いは子供)と家族が、木の箸をくべてそれが燃え上がるのを見て手をたたく。「火箸をもす」は「木箸を火でもす」の意であろう。寒い尺余の雪、降り止まぬ時雨、家内ははなやいだ世界はないが、家族数人が僅かに木切れを燃やして興がるという所にささやかな温かみ・ぬくもりがある。庶民一茶の面目句。切れ字「けり」。

②④ 木がらしにくすくす豚の寝たりけり

木枯らしが激しく吹く、それは砂塵を伴い一向に吹き止まぬ。さてこの村にも豚小屋があり、十頭足らずの豚が風を避け豚舎の隅にかたまり「くすくす」といった寝息を立てて「嵐を無視して」眠っている。初五・動の世界、中・下(微動はあるが)静の世界、「くすくす」という擬声語の用法も巧みである。人間も騒音のただ中で熟睡することもある。素材自体がユーモラスで読者の微笑をさそう。切れ字「けり」。

②⑤ むつかしや初雪見ゆるしなの山

雪国信濃に今年も初雪がやってきた。神無月から師走にかけて年中行事である。枯草が目立つ四方の山々、それにまだらに雪が降る、山自体もむつかしく不機嫌な相貌を呈する。「むつかし」のニュアンスはむつかしいがこれから半年もの冠雪に見舞われる

四囲の山々の心憎擬人表現であろう。こうした句は中部・北陸・山陰等の雪国でないと「むつかし」との感覚表現は句作できぬであらう。切れ字「や」。

②⑥ 雪散るやおどけも言へぬ信濃空

信濃の国は越後・飛騨・甲斐等と共にアルプス級の高山が連なつた雪国である。「しなの山」は口が重いという、重くもなろう歳末にもなると来る日も来る日も鈍色の曇天からふうわりふうわり止め所なく雪片が降ってくる。その灰色(グレー)の世界に閉じこめられると「おどけ・あほうごと・洒落」：「もう気が失せるのである。「これがまあ終(つい)の住みかか雪五尺」とよんだ一茶の実感句である。「おどけもいえぬ」が頗るよい。切れ字「や」。

(津山商高講師、昭和二十八年辛酉一回生)

(平成三年葵月二十四日)